フロムとラザーズフェルド，そして潜在構造分析の誕生

―― 権威主義的性格の精神分析と計量分析 ――

木　村　邦　博

1. 本稿の目的

潜在構造分析（latent structure analysis）という計量分析の手法・理論は，研究対象の中に直接的に観察できない複数の類型とそれらの類型を位置づける潜在的特性空間があると想定し，その潜在的空間と類型を，観察可能な変数によって作られる顕在的特性空間から推測するものである（e.g. 浅野・江島 1993；Collins and Lanza 2013；藤原ほか 2012；Lazarsfeld 1950a；Lazarsfeld 1950b；Lazarsfeld 1972；Lazarsfeld and Henry 1968；Vermunt 2010；本稿の付録も参照）。本稿では，潜在構造分析の考え方がどのような問いや課題から生まれてきたのか，仮説を提示し検討する。このような試みは，「問い」を主題とした社会学史（木村 2009）を実践するものと位置づけることもできるだろう。

検討に際して，フロム（Erich Fromm, 1900-1980）とラザーズフェルド（Paul F. Lazarsfeld, 1901-1976）というふたりの社会学者に注目する[1]。潜在構造分析の提唱者である Lazarsfeld がそのアイディアを最初に公表したのが Stouffer（[1950] 1966）に収録された論文であったためか，その起源は Samuel A. Stouffer との共同研究にあるといわれている（Sills, 1968, p.418；Sills 1987, p.269）。しかし Lazarsfeld はこの分析手法を発表する以前に，労働者とホワイトカラーの権威主義的性格[2] に関する Fromm の調査研究

[1] 人名表記の方針を示しておく。Fromm と Lazarsfeld については本稿の表題および本文初出時のみカタカナ表記で示す。しかしそれ以降，このふたりも含め，西洋人名はすべてアルファベット表記とする。

[2] Fromm は character（ドイツ語では Charakter）という術語を使うことが多いけれども，personality を使っている著作もある。Lazarsfeld は personality を用いている。概念としては同じものを指示しており互換可能だと解釈したけれども，本稿において character（Charakter）には「性格」，personality には「パーソナリティ」という訳語をあてた。本稿で引用する権威主義的性格・パーソナリティ関係の文献で執

に対して統計学的見地から助言を行っていた。その調査研究において採用された，目に見える顕在的な回答パターンから目に見えない潜在的なものを探るというアプローチに注目することで，潜在構造分析誕生の背景に迫りたいと私は考えている。

ふたりの略歴を記しておこう。Fromm はマルクス主義理論と精神分析との統合をめざした社会学者・社会心理学者。1930 年，フランクフルト社会研究所（Frankfurter Institut für Sozialforschung）のメンバーとなる。1932 年に渡米し，1933 年，コロンビア大学に本拠地を移した社会研究所[3] のメンバーと合流した。しかし 1939 年に社会研究所を離れることになった。彼は社会的性格という視点から現代社会分析を行い，権威主義的性格に関する社会心理学的研究の理論的・実証的基礎を築いた。『自由からの逃走』（Fromm 1941）などの著書がある。

Lazarsfeld はウィーン生まれの計量社会学者。1933 年にロックフェラー財団の奨学金で渡米，コロンビア大学に本拠地を移した社会研究所のメンバーと，Robert S. Lynd の紹介により知り合い，メンバーとの共同研究にも従事した。第 2 次世界大戦中のアメリカ軍兵士の研究で潜在構造分析を提唱し，Stouffer, et al.（[1950] 1966）に寄稿。潜在構造分析に関する彼の研究は Lazarsfeld and Henry（1968）としてまとめられている。彼の業績は，社会調査データの分析手法の研究にとどまらず，投票行動研究，マスコミュニケーション研究（オピニオンリーダー，コミュニケーション・影響の 2 段の流れ）などに及んでいる。

本稿で検討する社会学史上の仮説で特に重要なのは，次のふたつである。

仮説 1　Fromm はドイツの労働者・ホワイトカラーに対する質問紙調査を実施し，そのデータ分析を行う中で，質問紙への回答に現れた顕在的態度からその背後にある潜在的なパーソナリティ類型を探ろうとした。回答パターンと政党支持との関連を見ることで彼は，「ドイツでナチズムが勝利したのはなぜか」という問いに対する答えとなりそうな仮説にたどり着いた。

筆時期が最も古いと推測される Fromm（1936）では Charakter が使われていることから，本稿表題には「性格」の方を採用した。

[3] コロンビア大学では「国際社会研究所」（International Institute for Social Research）という名称も用いられた。本稿では研究所の継続性を強調する場合，あるいは所在地を特定する必要がない場合には，単に「社会研究所」と表記する。

仮説 2　Lazarsfeld は Fromm の調査研究に対し統計学的助言をした経験をもとにその後，顕在的な回答パターンから潜在変数を推定するという考え方を概念的・数学的に厳密に定式化し，潜在構造分析と呼ばれる様々な統計モデルを導いたのであろう。

以上も含め本稿で提示し検討を加える仮説は，主に学術論文・書籍などの文献を参照して構成したものである[4]。そのため，たとえば手紙やインタビュー記録，草稿等の資料によって十分な裏づけが得られているわけではなく，推測にとどまっている部分も多い。今後，仮説・推測に対する反証となるような事実があるか，上記のような資料などを参照してさらに検討する必要がある。この意味で，本稿における議論には限界があることをあらかじめ述べておきたい。

2.　労働者・ホワイトカラーと権威主義的性格，潜在的意味と顕在的意味

潜在構造分析が誕生した背景を探るためにまず注目したいのが，労働者・ホワイトカラーの権威主義的態度に関する Fromm（1980）の研究である。彼は，質問紙調査への回答に現れた顕在的態度からその背後にある潜在的なパーソナリティ類型を探ろうとした。そのために用いた方法には Lazarsfeld からの影響がうかがえる。回答パターンと政党支持との関連を見ることで Fromm は，「ドイツでナチズムが勝利したのはなぜか」という問いに対する答えとなりそうな仮説にたどり着いた。それは，左翼政党支持者の中にも反抗的・権威主義的パーソナリティの人が一定程度存在し，このような人たちが後にナチス支持に回ったというものだった。

2.1　労働者・ホワイトカラーの調査研究

1929 年，Fromm が中心になってドイツの労働者とホワイトカラーを対象とした質問紙調査が行われた。これは面接調査でなく，調査員が質問紙（調査票）を配布し，社会研究所の宛名が書かれた封筒に入れて回答者に返送してもらう形で実施された（Fromm

[4] Fromm や Lazarsfeld の評伝，社会研究所の歴史に関する文献の引用は，検索・入手して読んだもののうち一部に限定せざるを得なかった。ドイツ語で執筆された文献は邦訳があればそれも参照し，英訳があれば（特に邦訳がない場合）それも参照するようにした。ただし，紙幅の関係でドイツ語文献の英訳に関する書誌情報は省略した。引用文献リストにおける論文名・書名等の表記にあたって，副題やシリーズ名等がなくても識別可能で内容がわかると判断したものはそれらを省略した。

1980, S.60, 訳 71-72 頁）。質問紙の配布数は 3,300 であった（Fromm 1980, S.51-52, 訳 60 頁）。ただし，最終的に分析に用いることができたのは 584 人の回答である（Fromm 1980, S.80, 訳 101 頁）。この調査は 1930 年に Max Horkheimer がフランクフルト社会研究所の所長に就任し，Fromm もまた正式なメンバーとなって以降，この研究所のプロジェクトの一環として位置づけられることになった[5]。

1940 年代には，この調査研究にもとづいて Fromm と共同研究者が執筆した書籍が刊行されると予告されていた[6]。しかしこの調査研究に関する Fromm の草稿が実際に出版されたのは，1980 年，Wolfgang Bonß による編集を経てのことであった。いったん出版が断念されたのは，社会研究所が本拠地を変えてコロンビア大学にたどり着くまでの間に記入済み質問紙を紛失しその一部しか残っていなかったためとも，草稿の内容をめぐって Fromm と Horkheimer との間に意見の対立があったためとも言われている（Jay 1973, p.117, 訳 168-169 頁；Bonß 1980, S.9, 訳 4-5 頁）[7]。

この研究の当初の目的は，ドイツの労働者とホワイトカラーの社会的・心理的態度を調べること（Fromm 1980, S.51, 訳 59 頁）だったと考えられる。質問紙によって収集しようとしたデータは，とりわけ読書や娯楽などの生活様式，女性の労働や子どもの教育

---

[5] この調査研究に対して共同研究者の Hilde Weiß が重要な役割を果たしたことが, Fromm（1980）の「まえがき」（Fromm 1980, S.49, 訳 58 頁）からうかがえるし，Bonß（1980, S.32, 訳 37 頁）もそれを強調している。なお，Samelson（1993, p.30）は Fromm がこの調査の設計に貢献したというのはありそうにないことだと考えている。Fromm が社会研究所に正式に所属した時期よりも以前にこの調査が実施されているし，Fromm は 1929 年にベルリン精神分析研究所で訓練を受けるためにベルリンに移ったばかりだったからである。しかし私は，Jay（1973, p.88, 訳 124 頁）や Wiggershaus（1986, S.69）が記していることを状況証拠として重視し，通説を支持しておく。Fromm は 1929 年，Horkheimer らとともにフランクフルト精神分析研究所（Frankfurter Psychoanalytische Institut）の設立にかかわりそのメンバーとなった（Jay 1973, p.88, 訳 124 頁；Wiggershaus 1986, S.69）。これはフランクフルト社会研究所と同じ建物にあり（Wiggershaus 1986, S.69），社会研究所に受け入れてもらっていると見なされていた（Jay 1973, p.88, 訳 124 頁）。ただし，この調査研究が Fromm の主導のもとに行われたという通説を支持するという判断が正しいか，直接証拠となる一次資料を参照して確認をとらなければならないだろう。

[6] この研究の題目，草稿に記載された題名，あるいは予定されていた書名に関する情報は，文献によって異なっている。少なくとも “Character of German Workers and Employees in 1929/30”（Fromm 1941, p.211, n.3, 訳 261 頁）, The German Worker under the Weimer Republic（Jay 1973, p.117, 訳 168 頁；Wiggershaus 1986, S.198）, “German Workers 1929 — A Survey, its Methods and Results”（Bonß 1980, S.7）の 3 つがある。

[7] Fromm から Jay にあてた手紙に，この研究の価値について Horkheimer との間で意見の違いがあったと書かれていたことを，Jay（1973, p.117, 訳 168-169 頁）は紹介している。Fromm は Bonß との会話ではもう少し踏み込んでおり，この研究があまりにもマルクス主義的で社会研究所にネガティヴな影響を及ぼしかねないと Horkheimer が判断した，と述べたという（Bonß 1980, S.9, 訳 4-5 頁）。

や企業の合理化に対する意見，司法体系や国家権力に対する意見，同僚や上司との関係，などに関するものであった（Fromm 1980, S.52, 訳 60 頁）。

しかしその後，1933 年にナチス（国家社会主義労働者党）がドイツで政権を掌握し社会研究所が国外に脱出することになって，この調査の意義が変容したようである。Wiggershaus（1986, S.193-194）によると Fromm は 1936 年に Horkheimer に宛てた手紙の中で，この調査研究の成果に期待することとして，政治・社会・文化に対する労働者の見解の記述のほかに，Fromm（1936）で示した性格類型の精緻化と，質問紙法に関する方法論的検討とを挙げていた。

2.2　権威主義的性格の理論

Fromm（1980）がデータ分析にあたり依拠した理論は，Fromm（1936）に示した権威主義的性格論だったと考えられる。Fromm（1936）は，「権威と家族」に関する社会研究所の研究をまとめた Horkheimer（1936）に収録されたもので，Horkheimer の論文と Herbert Marcuse の論文とともに，この本の理論的中核をなしている。Fromm（1936）の議論のうち，Fromm（1980）でのデータ分析と特に関係が深いのは「権威主義的・マゾヒズム的性格」という節である。

Fromm（1936, S.113, 訳 50 頁）は Sigmund Freud の理論を踏まえ，性格は欲動構造が一定の社会的条件に適応するために発達すると考える。昇華と反動形成によって欲動構造が性格特性に変化し，自我の中に現れるのである。

性格は個々の特性を寄せ集めたものでなく，そこには一定の構造がある。権威主義的性格の構造的特徴は，マゾヒズム的傾向とサディズム的傾向が同時に存在することである（Fromm 1936, S.114, 訳 51-52 頁）。このふたつの傾向は，権威主義的社会において充足される。その社会では，権威主義的ヒエラルキーを必要とする経済構造によってサドマゾヒズム的性格が形成される（Fromm 1936, S.117-118, 訳 55 頁）。ただし，サドマゾヒズム的欲動構造と権威主義的性格構造がどの程度強く発達するかは，時代や階級によっても異なる（Fromm 1936, S.121, 訳 59 頁）。

権威に対する反逆には「反抗」と「革命」というふたつの類型がある。前者は権威主義的性格構造が変化しないまま権威から離反することである。後者は性格構造の徹底的変化をともなうもので，その変化の結果，強い権威を求める衝動が弱まり，さらにはその衝動がなくなることもある（Fromm 1936, S.130-131, 訳 70-71 頁）。

Horkheimer（1936）には，社会調査研究所がヨーロッパの様々な国で実施した，権威と家族に関する調査の紹介や，研究所のメンバーやつながりのある研究者による寄稿も含まれている。1929 年にドイツで実施された労働者・ホワイトカラーの調査についても，目的・実施の概要，質問紙，性格類型に関する説明，自由回答の抜粋（性格類型別に整理したもの）[8] が掲載されている　（Horkheimer 1936, S.239-271）。

2.3　データ分析の方法

Fromm（1980）が調査データを分析する際に採用した方法は，Lazarsfeld（1937）に言及していることからわかるように，Lazarsfeld からの影響を受けたものであった。「まえがき」（Fromm 1980, S.49, 訳 58 頁）には，Lazarsfeld から統計処理上の諸問題に関する助言を受けたことが記されている[9]。また「労働者の社会心理学的研究」という分野での先行研究のひとつとして，Lazarsfeld が共同研究者と実施した失業者の研究（Jahoda, et al. 1933）が挙げられている（Fromm 1980, S.51, 訳 60 頁）。

Fromm（1980）の方法論で重要なのは，記述的分類と解釈的分類，顕在的意味と潜在的意味という考え方である。彼は質問紙への回答の分類にあたり，記述的分類と解釈的分類の両面からアプローチした。人が自分の思想や感情について述べることは，本人が主観的に正直に述べたと思っていたとしても，額面通りに受け取ることはできず，解釈することが必要だからである（Fromm 1980, S.54, 訳 63 頁）。

記述的分類においては次のような方針を採用した。回答からすぐに構造が明らかになるような意見や態度は，質問を考えた際の観点に従って分類する（Fromm 1980, S.63, 訳 75 頁）。他方でひとつの質問に複数の観点が含まれる場合には，判断の基準や指標（Merkmal）を組み合わせることでカテゴリーを作り出す（Fromm 1980, S.63, 訳 76 頁）。この方法は Lazarsfeld（1937）のいう「土台構築」（substruction）[10] と「プラグマティックな縮約」（pragmatic reduction）の応用である。土台構築は，ひとつの質問にもとづいて

---

[8] 性格類型別に整理した自由回答の部分は Fromm（1980, S.256-273, 訳 322-358 頁）に再録されている。

[9] この「まえがき」には共同研究者としてほかに 4 名が挙げられている（注 5 で触れた Hilde Weiß も含む）。そのうち Anna Hartoch と Herta Herzog は Lazarsfeld がニューアーク大学にいたときの研究グループに所属していた（Wiggershaus 1986, S.193）。Herzog はウィーンで Lazarsfeld と同様，Karl Bühler と Charlotte Bühler の研究グループのメンバーだった（Lazarsfeld 1972, p.xi, 訳 9 頁）。

[10] Lazarsfeld（1972）の邦訳書において “substruction” は「基礎部分化」と訳されている。またこの考え方を紹介している Becker（1998）の邦訳書では「基層類型化」という訳語が採用されている。

類型化を行った後，その質問に含まれる複数の観点を取り出して組み合わせを考えることで，類型化の見直しを行うことである。その結果として新しい類型を設けることが必要だと気づく場合もある（Lazarsfeld 1937, pp.132-136）。プラグマティックな縮約は，複数の変数あるいは観点から論理的にあり得る組み合わせを枚挙した後，その組み合わせの中でひとつにまとめられるものは何かを考えて，より少ない数の類型で議論が展開できるようにすることである（Lazarsfeld 1937, pp.127-128）。

解釈的分類は，次のような考えにもとづいて実施された。回答者が自分の行為の動機と見なしていることは，「合理化」であることが多い。真の動機は背後に隠れている。そこで，人が何を考え行うかでなく，なぜそうするかを理解しようとする。こうして解釈した「隠された意味」にもとづき分類を行う（Fromm 1980, S.64, 訳 76-77 頁）。Fromm（1980, S.64, 訳 77 頁）は，綿密な解釈を行うことにより，ある種の行動の型が，深層にあるパーソナリティ特性を示していることを明らかにできると述べている。

解釈的分類を行うことで，回答の顕在的意味と潜在的意味との関係が解明できる。Fromm（1980, S.65, 訳 79 頁）は，その両者の間に激しい対立が現れる場合があることを強調している。

ここで，合理化，解釈の必要性，行動の型とパーソナリティ特性，潜在的意味と顕在的意味などの考え方は，精神分析にもとづくものであることに気をつけねばならない。Fromm（1980）は引用文献として示していないけれども，『夢判断』（Freud 1900），『自我とエス』（Freud 1923）などの議論を踏まえたものといえるだろう。

2.4　パーソナリティ類型と政治的態度の分析

Fromm（1980）の中で，実際にデータ分析にもとづいて権威主義の問題を具体的に論じている箇所は，第 4 章「パーソナリティ類型と政治的態度」（Fromm 1980, S.225-273, 訳 283-358 頁）である。この章で Fromm が用いた分析手続は 5 段階からなり，その概略は次のとおりである。(1) 質問項目から項目群を構成する。(2) 各項目への回答カテゴリー（選択肢，あるいはそれを分類・再編したもの）にもとづいて，各項目群における回答タイプの分類を行う。(3) 各項目群の回答タイプを組み合わせて回答パターン（Syndrome）を構成する。(4) 回答パターンとパーソナリティ特性との関連を，自由回答の解釈も参照しながら考察する。(5) 回答パターンと支持政党との関連から，パーソナリティ類型と支持政党との関連を考察する。（この (1) から (3) までの手続につい

表 1.　項目群，質問項目，回答カテゴリーと回答タイプ（Fromm 1980）

項目群と質問項目	各項目の回答カテゴリー				回答タイプ			
	急進的	権威主義的	妥協志向	その他	急進的 *R*	権威主義的 *A*	妥協志向 *K*	その他 *I*
1.　政治観								
(1) よりよい世界の実現法	R	A	K	I	少なくとも 1 項目で R，他の項目に A はなし	少なくとも 1 項目で A，他の項目に R はなし	少なくとも 1 項目で K，他の項目に R も A もなし	左記の 3 タイプ以外，不整合な回答を含む
(2) 偉人	R	A	K	I				
(3) 世界大戦の防止策	R	A	K	I				
(4) インフレの責任	R	A	K	I				
2.　権威に対する態度								
(1) 有配偶女性の職	R	A	K	I	(1)（2）の少なくとも 1 項目に R，他の項目に A なし	少なくとも 1 項目で A，他の項目に R はなし	少なくとも 1 項目で K，他の項目に R も A もなし	左記の 3 タイプ以外，不整合な回答を含む
(2) 子どもへの体罰	R	A	K	I				
(3) 運命への責任	R	A	K	I				
(4) よりよい世界の実現法	R	A	K	I				
3.　隣人に対する態度								
(1) 同僚・上司との関係	R	A	K	I	（2）に R，（1）は A 以外	少なくとも 1 項目で A，他は R 以外	少なくとも 1 項目で K，他は R も A もなし	A と R が 1 項目ずつ，または両方とも I
(2) 友人への金品貸与	R	A	K	I				

注　各項目の回答カテゴリーはローマン体（立体），回答タイプはイタリック体（斜体）で表している。「1. 政治観（1）よりよい世界の実現法」と「2. 権威に対する態度（4）よりよい世界の実現法」は同じ質問項目である。

表 2.　3 項目群への回答パターン（Syndrome）とパーソナリティ類型（Fromm 1980）

回答パターン	1. 政治観	2. 権威に対する態度	3. 隣人に対する態度	関連が見られるパーソナリティ類型
R 中心の組み合わせ				
明らかに *R* 中心の組み合わせ	*R*	*R*	*R*	ラディカル（革命的）パーソナリティ
	R	*R*	—	
それ以外の様々な組み合わせ				
A 中心の組み合わせ				
明らかに *A* 中心の組み合わせ	*A*	*A*	*A*	保守的・権威主義的パーソナリティ
	A	*A*	—	
それ以外の様々な組み合わせ				
整合性のない組み合わせ	*R*	*A*	—	反抗的・権威主義的パーソナリティ
その他の組み合わせ				

注　— という記号は「その他」の回答タイプを表す。

ては表 1 に，（4）の手続については表 2 に，整理して示しておく。）

Fromm はまず，質問項目を，政治観，権威に対する態度，隣人に対する態度という 3 つの項目群にまとめた。政治観に関する質問群は 4 項目で，質問内容はそれぞれ，よりよい世界の実現法，偉人，世界大戦の防止策，インフレの責任，である。権威に対する態度に関する質問群は，有配偶女性の職，子どもへの体罰，運命への責任，よりよい世界の実現法[11] に対する態度を尋ねる 4 つの項目からなる。隣人に対する態度に関する質問群は 2 項目で，同僚・上司との関係と友人への金品貸与とに関するものである。

次に，各質問に回答カテゴリーを設定した。回答カテゴリーは，選択肢あるいはそれを分類･再編したもので, R：急進的（ラディカル）, A：権威主義的, K：妥協志向, I：その他の 4 つを考えた。

続いて項目群内の各項目への回答カテゴリーにもとづいて，各項目群における回答タイプを分類した。回答タイプは次の 4 つである。*R*：急進的，*A*：権威主義的，*K*：妥協志向，*I*：その他[12]。

さらに，3 つの項目群での回答タイプから回答パターンを構成した。たとえば，政治観の回答タイプが *R*，権威に対する態度が *A*，隣人に対する態度が *I* ならば，*RA*－となる。（Fromm は回答パターンを示す際には，「その他」にあたる回答タイプを表す記号として－を用いている。）こうして構成されたそれぞれの回答パターンに属する回答者を数え，集計を行った。集計にあたって，度数の少ないパターンを省略する場合もあれば，複数のパターンをひとつにまとめることもあった。度数の最も大きな回答パターンは *R*－－で 78 人だった。しかし，Fromm の興味を引いたのはむしろ，*RR*－（56 人），*AA*－（40 人），*RA*－（27 人）などだった（Fromm 1980, S.246, Tabelle 4.14, 訳 310 頁）。

この回答パターンのそれぞれがどのようなパーソナリティ類型に対応するか考察した。その際，パーソナリティ特性は，自由回答の解釈も参照しながら分類した。その自由回答は，上記の質問項目に付随して書かれたものものあれば，愛読書，悪書，購読している新聞，好きな芝居や映画，音楽，ファッション，スポーツなどに関する質問に付随したものもあった。こうしてパーソナリティ類型として想定されることになったのは，

---

[11] 権威に対する態度に関する質問群に含まれる，よりよい世界の実現法に対する態度を尋ねる質問項目は，政治観に関する質問群に含まれる質問項目と同じものである。

[12] Fromm（1980）では回答カテゴリーを表す記号（文字）と回答タイプを表す記号（文字）がいずれもローマン体（立体）で区別がつかない。本稿では前者をローマン体（立体），後者をイタリック体（斜体）にして区別できるようにした。

「ラディカル（革命的）」,「保守的・権威主義的」,「反抗的・権威主義的」という 3 つの型であった（Fromm 1980, S.256-273, 訳 322-358）。

Fromm（1980, S.249-250, 訳 315-317 頁）は，回答パターンを大きく「*R* 中心の組み合わせ」,「*A* 中心の組み合わせ」,「その他の組み合わせ」の 3 つに再編した上で，特に「*R* 中心」と「*A* 中心」との対比を行った。ただし,「*R* 中心」「*A* 中心」それぞれの中でも実際に述べられた意見と性格構造とが一致しているという意味で「整合的」（Fromm 1980, S.249-250, 訳 315 頁）と考えられる回答パターンと，そうでない回答パターンに特に注目した。そうして取り上げられることになったのは,「*R* 中心」の中では *RRR* と *RR* − という「整合的なラディカル」にあたるパターンで，これはラディカル（革命的）なパーソナリティと関連すると考えられた。「*A* 中心」の中では，*AAA* および *AA* − という「整合的な権威主義」のパターンと，*RA* − という「整合的でない」パターンが取り上げられた。そして，前者は保守的・権威主義的パーソナリティに，後者は反抗的・権威主義的パーソナリティに関連すると考えた。

最後に，回答パターンと支持政党との関連を見て，そこからパーソナリティ類型と支持政党との関連を推測した（Fromm 1980, S.251, Tabelle 4.15, 訳 316 頁）。左翼政党（社会民主党，社会主義左派，共産党）支持者 457 人（Fromm 1980, S.87, Tabelle 2.7, 訳 109 頁）の中では「*R* 中心」が 40%,「*A* 中心」が 25% だったけれども,「整合的なラディカル」は 15%,「整合的な権威主義」は 5% であり,「整合的でない」パターン（*RA* −）も 5% いた。ここから Fromm（1980, S.249, 訳 314 頁）は，左翼政党支持者の中にも反抗的・権威主義的パーソナリティの人が一定程度存在し，このような人たちが後に 1930 年代にはいってからナチス支持に回ったのではないか，という予想を立てた。ナチスはワイマール共和国・金融資本・ユダヤ人を攻撃の対象とし，党と純血社会と総統という新しい権威を打ち立てることにより，反抗的性向と全面服従への願望を同時に満足させることを可能にしたからである。

以上のような分析・考察を通して Fromm は,「ドイツでナチズムが勝利したのはなぜか」という問いに対する答えの感触をつかんだと思われる。彼はその答えが, 経済的・政治的要因のみによる説明でもなければ，心理学・精神分析のみによる説明でもないと考えた（Fromm 1941, pp.205-207, 訳 230-231 頁）。

2.5　その後の権威主義研究

Fromm（1980）（およびその英訳）に対しては，分析に用いた標本が偏っている，数値の誤りや説明不足のところが多い，といった厳しい指摘もある（e.g. Samelson 1993, p.32）。しかし，多くの研究者から好意的な評価を受けているようである。たとえば Wiggershaus（1986, S.198-199）は Fromm によるこの研究が歴史的資料としても重要であり，精神分析にもとづいた経験的な社会心理学研究として先駆的であったがゆえに，当初刊行されなかったことに愕然とすると述べている。彼はまた Fromm と Lazarsfeld が方法論の面でも精緻化を進めたことを評価している（Wiggershaus 1986, S.201）。Brunner（1994）は Fromm（1980）の優れた点を列挙していった後，データ分析の実例としてよい刺激となるものであり，政治心理学者にとって今なお思索のための糧となる，とまとめている。Baars and Scheepers（1993）はその後の権威主義的パーソナリティ研究の理論的・方法論的基礎となったと述べている。

Fromm（1941）は権威主義的性格に関する自身の議論（Fromm 1936, 1980）をいくつかの点で修正・拡張・一般化していった（ただしそれは経験的データにもとづくものというよりは，理論的なものである）。Fromm（1980）のデータ分析では労働者・ホワイトカラー層での「反抗的･権威主義的」な人々を取り上げていたけれども，Fromm（1941, p.209, 訳 234 頁）ではこれがホワイトカラーだけでなく小規模商店主や職人（artisan）を含めた「下層中産階級」とりわけその新しい世代の社会的性格だと位置づけられた。これらの職業の人々は独占資本主義によって経済的地位が脅かされていたという点で共通するからである。それに加えて下層中産階級にとって脅威となったといえるのは，労働者階級の社会的威信の高まりとともに威信が相対的に低下したこと，父親の権威や旧来のモラルが崩壊したことなどである（Fromm 1941, pp.212-213, 訳 236-237 頁）。他方で，労働者は労働運動の度重なる敗北により希望を失っており，その社会的性格は保守的・権威主義的な型が典型となり，それゆえナチスを支持したと Fromm（1941, pp.207-208, 訳 231-232 頁）は考えた。彼はさらに，社会経済的構造（下部構造）と思想・文化など（上部構造）に性格構造（心理過程）を加えた三者の相互関係という形でマルクス主義と精神分析の思想を統合し，それによって歴史や現代社会の分析を行うための視座を確立しようとした（Fromm 1941, Appendix, 訳 305-328 頁）。

Fromm（1941, 1980）の研究は，権威主義的性格に関するその後の経験的研究を牽引する原動力となった（Baars and Scheepers 1993）。ただし 1970 年代にはいると権威主義

的性格研究の数はわずかになっていった（Samelson 1993, p.22-23）。

社会研究所のメンバーは，カリフォルニア大学バークレイ校の心理学者の協力を得て，権威主義とユダヤ人排斥に関する経験的研究を遂行し，Adorno, et al.（1950）としてまとめた。この研究は，権威主義とエスノセントリズムとの関連を取り上げた点などが高い評価を受ける一方で，理論的・方法論的な面での批判も多かった（Stone, et al. 1993）。

Fromm もまた，一時的にであるけれども，権威主義的性格を含む社会的性格の経験的研究に戻っている。Fromm and Maccoby（[1970] 2017）は，社会変動が進むメキシコの村落において，地位の低い農民の社会的性格に関する質問紙調査を行った。この質問紙は，精神分析的な意味での解釈を目的としたものであった。データ分析の段階では，理論的に考えられた様々な性格指向を測定するための質問への回答を得点化して，因子分析を適用している。

因子分析はたとえばテストや尺度の得点などの観測値から潜在的な「因子」を推定する統計手法である。これは，顕在的意味と潜在的意味との関係に注目する Fromm（1980）の考え方に適合的な手法だといえる。他方で Lazarsfeld は後に潜在構造分析を考案し，これにもとづいた統計モデルで顕在変数から潜在変数を推定するという課題に取り組んだ。その中で Adorno, et al.（1950）へのコメントも残している。次節では Lazarsfeld の著作から潜在構造分析の背景についてさらに検討して行くことにしよう。その際，特に精神分析や権威主義的パーソナリティ研究との関係に注目する。

3.　潜在構造分析の誕生

まず Lazarsfeld の知的背景を明らかにした上で，潜在構造分析のアイディアのもとになったと彼が述べているものについて検討して行こう。社会研究所のメンバーと同様に Lazarsfeld も精神分析とマルクス主義から影響を受けていた。（ただし，彼の知的背景にはそれ以外の思想的伝統も流れ込んでいる。）潜在構造分析の思想史について論じた文章には，診断的手続のひとつの例として精神分析に言及がある。

潜在構造分析の応用やその後の展開との関係で興味深いのは，Adorno, et al.（1950）の権威主義的パーソナリティ研究に対する Lazarsfeld のコメントが次第に変化していったことである。彼は晩年，潜在構造分析の考え方にもとづいて権威主義的パーソナリティ

研究の方法論的課題をとらえ直すようになったのではないだろうか。

3.1　Lazarsfeld の知的背景

Lazarsfeld は社会研究所のメンバーと関心を共有していた（Wheatland 2004, p.82, n.17 ; Wheatland 2005）[13]。Horkheimer（1936）では，家族と権威に関するスイス青少年調査の報告（Horkheimer 1936, S.353-415）の執筆者として Käthe Leichter[14] とともに名前を記している（ただし，目次にはこの部分の執筆者名が表示されていない）。この家族と権威に関する研究で，分類にあたっての「土台構築」を Fromm とともに行った際のエピソードを，後にアメリカ社会学会会長講演（Lazarsfeld 1962, p.759 ; Lazarsfeld 1972, pp.324-325, 訳 333 頁）の中で紹介している。土台構築を含めた方法論的検討の論文（Lazarsfeld 1937）は社会研究所が発行した機関誌に掲載されたものである。その後も Lazarsfeld は社会研究所メンバーとの共同研究に携わった。ラジオ研究のように Lazarsfeld のプロジェクトに社会研究所のメンバーが参加する形を取った場合もあれば，偏見・差別問題（ユダヤ人排斥）の研究のように社会研究所主導のプロジェクトに Lazarsfeld が関与した場合もあった（Jay 1970, pp.219-226, 訳 321-331 頁 ; Wiggershaus 1986, S.266-276, S.307-309）。

Fromm（および社会研究所の他のメンバー）との共通点（Zeisel 1979, pp.10-11 ; Wiggershaus 1986, S.189, S.201）としては，Lazarsfeld もマルクス主義と精神分析から影響を受けていたことを指摘することができる。ただしマルクス主義といっても，Lazarsfeld の場合はオーストリアマルクス主義（Austro-Marxism）と呼ばれる思想だった。彼はオーストリア社会民主党とその政治運動にも深く関わっていた。他方，Alfred Adler[15] は近くに住んでいて面識があったし，Freud の本や精神分析に関する印刷物で入手可能なものは読んでいた[16]。

---

[13] Wheatland（2004, p.82, n.17）は，「Lazarsfeld と研究所のメンバーは 1933 年より前，ヨーロッパにいる間に，お互いの存在に気づいていた（had been aware of one another）」とも述べている。しかし，その証拠となる文献の参照などを示していない。

[14] Käthe Leichter はオーストリア出身で，Carl Grünberg（1924 年から 1929 年までフランクフルト社会研究所の所長）の学生だった。オーストリアの政変のため 1934 年にスイスに移住。1934 年と 1936 年に社会研究所の仕事に従事した（Wiggershaus 1986, S.161-162）。

[15] 厳密に言えば Adler は Freud と袂を分かって「個人心理学」を標榜していたので，精神分析と呼ぶのは適切でないかもしれない。

[16] Freud は当時ウィーン在住だったけれども,「アウトサイダー」で謎めいた（得体の知れない）存在だっ

実際，彼が携わった調査（Jahoda, et al. 1933）に見られる長期失業者への関心は，オーストリアマルクス主義から導き出されたものだった。Clavey（2019）はこの調査が，社会主義にふさわしい模範的労働者を育成するというオーストリア社会民主党の目標にもとづいて行われた（しかし調査結果によってその目標実現の難しさが明らかになってしまった）という，当時の政治的文脈を強調している。

また，市場調査に関する初期の著作（Lazarsfeld 1934）には精神分析（Freud や Adler）の直接的影響がうかがえる記述がある。それは，データ分析における直観的説明（hunches）の役割を論じた箇所である（Lazarsfeld 1934, pp.62-63）。靴の購買行動に関する面接調査で，ある女性客は，靴を買うときにおどおどして不快になると話した。これを劣等コンプレックス（inferiority complex）の理論から解釈してみると，他の面接記録でも，販売員とのやりとりにおいて劣等コンプレックスの形跡が見られることがわかった[17]。このような直観的説明は，データに照らして正しくないと最終的にわかれば退けることができるので，害はない。他方で，様々な解釈の可能性を見逃す方が危険だと Lazarsfeld は述べている。この時点で彼は，精神分析の発想にもとづいて思いつかれた解釈・仮説も経験的研究の役に立つと考えていたといえよう。

さらに，1937 年，Lazarsfeld がプリンストン大学のラジオ研究プロジェクトに関わるようになった直後には，Fromm を含む精神分析学者数人を招いて会合を開き，アイディアを募っている（Lazarsfeld 1969, pp.319-320, 訳 246-247 頁）。

とはいえ，Lazarsfeld には次のようなものからの影響もあった（Lazarsfeld 1969, pp.273-275, 訳 168-169 頁；Zeisel 1979, pp.10-11；Wiggershaus 1986, S.188-189）。学生時代に学んだ数学，ウィーン学団の哲学者たち，イギリスとアメリカ合衆国の経験的な社会科学研究，Karl Bühler と Charlotte Bühler 夫妻[18] の心理学研究所で助手として働い

たという（Zeisel 1979, p.11）。これは，Freud がウィーン生まれでなかったからかもしれない。

[17] このエピソードは，Lazarsfeld（1972, pp.214-216, 訳 246-249 頁）にも（1955 年時点での）回顧談として出てくる。ただし，その位置づけは微妙に変化している。その箇所では，市場調査における解釈において，様々な種類の本能を挙げるようなアプローチよりも，すべての人間行動を単一の基本的な欲望・動因の概念で説明することの重要性を論じる文脈で取り上げられている。こうした概念の含意から結論を導くのは正当な科学的手続であるとする一方で，現時点では明確な形で確立された概念は少ないので控えめな知識に依拠しなければならないと注意を促している。

[18] Lazarsfeld は Bühler 夫妻の援助でオーストリア経済・心理研究所（Oesterreichische Wirtschafts-psychologische Forschungsstelle）を設立した。その初代所長は　Karl Bühler だった。この研究所は主に市場調査などに従事したけれども，1935 年には社会研究所からオーストリア若年労働者調査実施の依頼もあった（Wiggershaus 1986, S.190）。

た経験，などである。これらは Fromm とは異なる知的背景といえる。

3.2　潜在構造分析の思想史

潜在構造分析は，観察できるものから観察できないものを探るという考え方にもとづいたものである。観察できる／できないという対比を表す際に，Lazarsfeld は顕在的／潜在的（manifest/latent）という言葉を用いている。Henry（1999）は Lazarsfeld がこの言葉を好んだのはおそらく彼が「ウィーン人」だったからだろうと述べ，精神分析からの影響をほのめかしている。

第 2 節で見たように，顕在的なものと潜在的なものという対比は Fromm（1980）も労働者・ホワイトカラーの研究で用いていた。そこで指摘しておいたように，この言葉をたどると Freud の『夢判断』（Freud 1900）に行き着く。

そうはいっても，潜在構造分析の思想史的背景を述べた Lazarsfeld and Henry（1968, pp.1-9）には，精神分析に言及がない。そこで大きく取り上げているのは，以下の 4 つである。(1) 自然科学での概念の測定。たとえば物理学での「磁気」の概念。（鉄でできた小さな物体の移動による測定と電磁誘導で生じる電流による測定。）(2) 哲学・心理学・社会学での概念形成に関する議論。William James, John Dewey, Gordon Allport, Émile Durkheim, Max Weber, Edward Tolman, Raymond B. Cattell などの著作を引用・参照している。(3) 医学における病気の診断手続。この手続には，確率的思考と様々な指標（indicators）の使用とを統合したものという特徴がある。(4) ガットマン尺度。外的基準がない場合の尺度構成法のひとつである。これは指標として量的変数でなく属性（attributes）を用いる点でも潜在構造分析と共通性がある。

とはいえ Lazarsfeld and Henry（1968, p.5, n.11）には，詳しくは Lazarsfeld（1966）を見よとの指示がある。（この Lazarsfeld［1966］は改訂の上 Lazarsfeld［1972, Chapter 1］として再録されている。）そこで Lazarsfeld（1966, pp.162-164 ; 1972, pp.25-27, 訳 43-45）を参照すると，そこには「診断」に関してさらに一般的かつ詳細な議論があり，夢や言い間違いから無意識の欲求とその抑圧を探る精神分析に関する言及がある。精神分析は診断的手続のひとつの類型，すなわち暫定的に仮定された法則を用いる診断方法の例として挙げられているのである[19]。

[19] Lazarsfeld（1966, pp.162-164 ; 1972, pp.25-27, 訳 43-45）は診断的手続の方法（すなわち観察できる指標から観察できないものを探る方法）として，次の 4 つを挙げる。(1) 確立された法則により，調べ

潜在構造分析は，回答パターンに関する集計をもとに度数分布表を作成し，そこから直接的に「潜在的意味」を探るものだったのではないだろうか。Fromm（1980）は自由回答から潜在的なパーソナリティ特性を推測し，回答パターンとの関連を見た[20]。これに対し Lazarsfeld は，複数の指標（質問項目）への回答のパターンそれ自体から潜在的なものを推定しようとしたといえる。これは外的基準のない場合の尺度構成にあたり，Lazarsfeld and Henry（1968）も指摘しているように，ガットマン尺度と同様の考え方にもとづくものである。

3.3　潜在構造分析と潜在クラスモデル

Lazarsfeld が潜在構造分析のアイディアを最初に提示した 2 つの論文（Lazarsfeld 1950a ; Lazarsfeld 1950b）は，Stouffer, et al.（[1950] 1966）に収録されている。Stouffer, et al.（[1950] 1966）は，第 2 次世界大戦中にアメリカ軍兵士を対象として実施された調査に関する叢書の第 4 巻として位置づけられており，この調査における測定と診断・予測の方法論を考察したものであった。

Lazarsfeld（1950a）にもとづいて，潜在構造分析の考え方を解説しよう。ただし，記号などには特に断りを入れずに補足や修正を加えることにする。

いま，単純化のために，潜在空間が 1 次元連続体であるとし，潜在変数 x $(-\infty < x < +\infty)$ としよう。潜在変数 x 上での回答者の分布を確率密度関数 $\phi(x)$ で表す。顕在変数 y も単純化のために 2 値変数とし，その一方の値を「肯定的」，他方の値を「否定的」と呼ぶ[21]。顕在変数 y における回答者の回答が肯定的である確率を p とし，潜在変数 x の値に対応する回答者の顕在変数 y における反応が肯定的である確率を $f(x)$ と表せば

たい特質（properties）を観察された特質に結びつける方法。たとえば放射線量を示すガイガーカウンター。このような方法は社会科学にはまだ存在しない。(2) 暫定的に仮定された法則を用いる方法。たとえば無意識の欲求とその抑圧を夢や言い間違いから診断する精神分析。(3) S-R 様式の診断。刺激 S を変化させて反応 R がどう変動するかを観察することで診断を行う方法である。たとえば，ラットの空腹の度合いを，餌を獲得するのに耐えうる電気ショックの量の測定から診断する。(4) R-R 様式，すなわち指標の共分散による診断。たとえば脈拍，爪噛み，歩き回りなどから「不安」を診断する。

[20] Lazarsfeld も自由回答の分類に関する方法論的研究を行っていた（Lazarsfeld and Barton 1951 ; Lazarsfeld 1972, Chap.10, 訳 262-282 頁）。

[21] 顕在変数の取り得る値が 3 つ以上の場合への理論・モデルの拡張は容易である。本稿の付録を参照。

$$p = \int_{-\infty}^{+\infty} \phi(x) f(x) dx$$

となる。潜在変数 x を横軸とし，顕在変数 y に肯定的に反応する確率を縦軸として $f(x)$ の曲線を描いたものを，「軌跡線」と呼ぶ。複数の顕在変数を区別することが必要な場合には $y_1, y_2, \ldots$ および $f_1(x), f_2(x), \ldots$ のように添字をつけることにする。

ここで，ふたつの顕在変数 y_1 と y_2 の同時分布を考え，それぞれの反応がともに肯定的である確率 p_{12} を考えよう。潜在変数の値 $x = x_c$ に対応する，回答者の顕在変数 y_1, y_2 での反応がともに肯定的である確率を $f_{12}(x_c)$ と表す。この $f_{12}(x_c)$ に関して

$$f_{12}(x_c) = f_1(x_c) f_2(x_c)$$

が成り立つとき，その性質を「局所独立」という。潜在変数 x のすべての値に関して局所独立であることは，ふたつの顕在変数が同じ潜在変数を独立に測定したものだからと考えてもよさそうだし，潜在変数がふたつの顕在変数の「共通原因」となっているからと考えてもよさそうだろう[22]。潜在変数 x のすべての値に関して，また m 個の顕在変数によって作られる顕在変数の組み合わせすべてに関して局所独立であるならば，

$$p_{12\cdots m} = \int_{-\infty}^{+\infty} \phi(x) f_1(x) f_2(x) \ldots f_m(x) dx$$

と表すことができる。

潜在構造分析においては，顕在変数･潜在変数の性質に関する仮定を置くことで，様々な種類のモデルを考えることができる（Lazarsfeld and Henry 1968）。その中で最も単純で，よく用いられるのが潜在クラスモデル（latent class model）である（e.g. Collins and Lanza. 2013；藤原・伊藤・谷岡 2012；Vermunt 2010）[23]。これは顕在変数も潜在変数も

[22] Lazarsfeld（1955；1958）はエラボレイションと呼ばれる統計解析手法も開発しており，この手法ではふたつの離散的な顕在変数 X と Y との関連が，第 3 の離散的な顕在変数 t を導入した場合にどのように変化するかをもとに，X と Y の間の関係を考察する。ここで，X と Y との 2 変数だけで見たときには両者の関連が大きいのに，t の値で分割した標本のいずれにおいてもその関連が見られなくなる場合（より正確にいうと統計的独立となる場合），X と Y の間に直接的な因果関係はなく，X と Y はいずれも t を共通原因として生じた結果だという「疑似相関」の可能性が示唆される。この顕在変数 t を潜在変数に置き換えたのが，潜在構造分析における局所独立性の仮定であることがわかる（Clogg 1981, pp.215-216）。ただし，局所独立性が成り立っているからといって，ふたつの顕在変数が同じ概念を独立に測定したものであるといえないことも，顕在変数の関連が疑似相関であるといえないこともある（Sobel 1997）。

[23] これ以外のモデルにはたとえば以下のようなものがある。潜在クラスに順序があるという仮定を導入したモデル，特に関数 $f(x)$（あるいはそれによって示される軌跡線）がステップ関数だと仮定する潜

離散変数とするという仮定を置いた潜在構造分析のモデルである。たとえば2値顕在変数（指標）m 個を用いて潜在クラスが T 個のモデルを考える場合，顕在変数ひとつに肯定的回答をする確率（p_i），ふたつに同時に肯定的回答をする確率（p_{ij}），…，m 個に同時に肯定的回答をする確率（$p_{123\cdots m}$）は次のような説明方程式（accounting equations）で表される（Lazarsfeld 1950a, pp.384-386；Lazarsfeld and Henry 1968, pp.21-26）。

$$p_i = \sum_{\tau=1}^{T} v_\tau p_{i|\tau} \quad (i=1,2,\ldots,m)$$

$$p_{ij} = \sum_{\tau=1}^{T} v_\tau p_{i|\tau} p_{j|\tau} \quad (i=1,2,\ldots,m-1;\ j=2,3,\ldots,m;\ i<j)$$

$$p_{ijk} = \sum_{\tau=1}^{T} v_\tau p_{i|\tau} p_{j|\tau} p_{k|\tau} \quad (i=1,2,\ldots,m-2;\ j=2,3,\ldots,m-1;\ k=3,4,\ldots,m;\ i<j<k)$$

$$\vdots$$

$$p_{123\cdots m} = \sum_{\tau=1}^{T} v_\tau p_{1|\tau} p_{2|\tau} p_{3|\tau} \cdots p_{m|\tau}$$

ただしここで，

τ ：潜在クラスの番号（$\tau=1,2,\ldots,T$）

v_τ ：τ 番目の潜在クラスの相対的規模，あるいはひとりの回答者が τ 番目の潜在クラスに属す確率（$\forall\tau$ について $0 \le v_\tau \le 1; \sum_\tau v_\tau = 1$）

$p_{i|\tau}$ ：τ 番目の潜在クラスに属するという条件のもとで i 番目の顕在変数に肯定的に回答する確率（$\forall\tau, \forall i$ について $0 \le p_{i|\tau} \le 1; \sum_i p_{i|\tau} = 1$; $p_{j|\tau}$，$p_{k|\tau}$ なども同様）

である。説明方程式の左辺にある項は観測値をその推定値とすることができるものであるのに対し，右辺に含まれる項はすべて未知のパラメータ（母数）である。

Lazarsfeld は潜在クラスモデルについて当初から重点的に検討を重ねてきた。しかし初期のころはその一般的な「解法」すなわちパラメータ推定の方法を得ることができな

在距離モデル（Lazarsfeld and Henry 1968, chap.5）。顕在変数が連続変数で潜在変数が離散変数であるとする潜在プロフィールモデル（Gibson 1959；Lazarsfeld and Henry 1968, chap.8）。パネル調査データへの適用を念頭に置き，時点間での潜在クラスの遷移にマルコフ連鎖を仮定したモデル（Lazarsfeld and Henry 1968, chap.9），およびそれを発展させた潜在推移モデル。複数の集団を想定した多群潜在クラスモデル（Clogg and Goodman 1984；Clogg and Goodman 1985）。近年，これらのモデルに拡張や修正等を加えた新しいモデルの提案もなされている。

かった。ただし彼は初期の論文（Lazarsfeld 1950a）からずっと，すべての顕在変数が 2 値変数の場合の潜在クラスモデルで，その説明方程式を連立方程式として解くことができ，かつその解がモデルの仮定に照らして有意味なものである条件について検討を続けた。また潜在クラス数や項目数によっては連立方程式として解くことができないことへの対応やくふうも Lazarsfeld（1950a）は考えた。彼のアイディアは，それぞれの項目について，潜在クラス間での応答確率の差に関する仮定を追加的に置くというものだった。この手続は，軌跡線の形状に制約を加えるものだといえる。

潜在クラスモデルの一般的な解法に関しては Green（1951）, Anderson（1954）, Gibson（1955），Lazarsfeld and Henry（1968）がそれぞれ提案を行った。Green（1951）の解法は因子分析における「共通性」の考え方を援用する点に特徴がある。Anderson（1954）, Gibson（1955）, Lazarsfeld and Henry（1968）の解法はいずれも，行列を用いて説明方程式を表現するけれども，その際にひとつの顕在変数を層化項目（stratifier item）[24] として扱うという Lazarsfeld（1950a, pp.386-396）のアイディアにもとづいたものである。Anderson（1954）や Lazarsfeld and Henry（1968）のアプローチは行列式を利用することになるので，「行列式による方法」（determinantal method）と呼ばれる（Goodman 1979）。

とはいえ, Lazarsfeld and Henry（1968）の解法（あるいは行列式による方法全般）は，確率分布あるいは確率変数という考え方を明示的に取り入れておらず，あくまで「近似的な解」を求めようとするものであった。そのため推測統計学の観点からは解釈が難しいところがある。また実際のデータを用いた分析でも，どの顕在変数を層化項目にするかで推定値が異なることがあるし，場合によっては確率を推定しているにもかかわらず負の値や 1 を超える値となったりすることがある（Lazarsfeld and Henry 1968, chap.4）。推測統計学上の問題に関して Anderson（1968）は，標本規模が十分に大きければ Lazarsfeld and Henry（1968）の解法による推定値は高い確率でパラメータ（母数）の値にかなり近くなること，その差は近似的に正規分布に従うことを示した。Lazarsfeld and Henry（1968, chap.4）ではパラメータの最尤推定に関する検討も行っているけれども，その当時に利用可能だったコンピュータ・プログラムの限界も指摘されている。

その後，Goodman（1974），Goodman（1979），Haberman（1988），Mooijaart and van

[24] その項目への反応で標本を層化したうえで他の項目の間の関連を見るので，層化項目と呼ばれる。Lazarsfeld and Henry（1968）は, 一般化して考えるなら層化項目はひとつである必要はないとしている。

der Heijden（1992）等の研究者が，ログリニアモデルなどカテゴリカルデータ分析の手法に関して蓄積されてきた知見やアイディアをもとに，潜在クラスモデルの推測統計学的展開を試みた。その成果により，現在では EM アルゴリズムを用いた最尤推定が一般的となっている（Collins and Lanza 2013）。

3.4　潜在構造分析の応用と権威主義的パーソナリティ研究の評価

実際に観測・測定を行って得たデータに潜在クラスモデルを適用する際には，たとえば指標（顕在変数）がすべて 2 値変数でその数が 4 であれば，それぞれの指標に対する肯定的回答を＋，否定的回答を－で表し，＋＋＋＋，＋＋＋－，＋＋－＋などの回答パターンに関して度数分布表を作成することから始める。（付録の表 A.1 は回答パターンに関する度数分布表の例である。）このような回答パターンに関する集計という考え方は，2.4 節で見たように，Fromm（1980）も採用したものであることを強調しておこう。ただし，Fromm の場合は複数の質問項目の回答カテゴリーから項目群における回答タイプの分類を行い，複数の項目群の回答タイプから回答パターンを構築するという，多段階の手続を用いる複雑なものになっていた。これに対し Lazarsfeld の場合の回答パターン作成手順は簡明なものになっている。

Lazarsfeld 自身が実データに潜在クラスモデルを応用した結果を示している例には，質問紙を用いて測定した個人の態度に関するものが多い[25]。そのうちデータや質問文などの出所・出典が明記されていて架空例でないと判断できるのは，アメリカ軍兵士の職務満足感の分析（Lazarsfeld 1950b, pp.432-441）と兵士のモラールの分析（Lazarsfeld 1954, pp.373-377）である。他の研究者による分析を Lazarsfeld が紹介しているものには，視聴者の視聴行動によるラジオ番組プログラムの分類（Lazarsfeld and Henry 1968, pp.117-120）などがある。

しかしながら潜在クラスモデルの応用・展開，あるいはより一般的に潜在構造分析の応用・展開との関係でとりわけ興味深いのは，Adorno, et al.（1950）の権威主義的パー

[25] 潜在クラスモデル以外のモデルにまで広げれば，たとえば次のような実データ分析への応用例がある。潜在距離モデルでは，神経症診断（Lazarsfeld 1950b, pp.441-456），役割葛藤状況での行動における個別主義的価値と普遍主義的価値（Lazarsfeld and Henry 1968, chap.5）などの分析がある。パネル調査分析では将校に対する兵士の態度の変容（Lazarsfeld 1950b, pp.447-452）の例がある。潜在プロフィールモデルの応用としては，地域共同体（コミュニティ）の分類に関する研究（Lazarsfeld and Henry 1965）を挙げることができる。

ソナリティ研究に対する Lazarsfeld の評価が次第に変化したように見えることである。この変化は，Adorno, et al.（1950）をめぐり多くの研究者を巻き込んで方法論的観点からの論争があったことをふまえたものと考えられる。

Wiggershaus（1986, S.456-457）によると Lazarsfeld は 1947 年，反ユダヤ尺度（Anti-Semitism scale, A-S scale）とファシスト尺度（Fascist scale, F-scale）に関する章の草稿を読み，Horkheimer に宛てて手紙を書いた。その手紙で Lazarsfeld は，社会研究所のメンバーの理論的アイディアと経験的研究とを結びつけることに初めて成功したものと評価したという。

しかしその後，Lazarsfeld（1959）は Adorno, et al.（1950）のファシスト尺度に「指標のドリフト」というべき問題が生じていることを指摘するようになる。社会研究で概念から測定（あるいは変量）への変換[26] を行う際に，説明の対象とする「そもそもの観察」（originating observation）を概念に対応させるような指標を考えることになる（Lazarsfeld 1959, pp.45-47）。その指標には，「表現」のための（expressive）ものと「予測」のための（predictive）ものがある。Adorno, et al.（1950）のファシスト尺度の場合，権威主義的パーソナリティの基本特性が反ユダヤ的態度を引き起こすという仮説を想定すると，表現のための指標は権威主義的パーソナリティの基本特性に関するものであるのに対し，予測のための指標は反ユダヤ的態度に関するものということになる（Lazarsfeld 1959, pp.49-51）。しかし権威主義的パーソナリティ研究の展開の中で，「指標のドリフト」[27] が生じ，指標がもともとの説明対象から外れたものになって行った（Lazarsfeld 1959, pp.53-55）。社会研究所の当初の研究関心は，1930 年頃のドイツで，労働者が権威主義的パーソナリティを持っているためにナチズムの運動に抵抗できないのではないか，ということだった。そして権威主義的パーソナリティ特性の考え方は，Fromm（1936,

[26] 概念から測定への変換は次の 4 つの段階からなる（Lazarsfeld 1959, p.47-48）。（1）説明の対象とする「そもそもの観察」（originating observation）からどういう分類をしたいのか定義を試みる段階，（2）対象を概念に対応させるような指標のユニヴァースを考える段階，（3）そのユニヴァースの部分集合を選び出して経験的研究の基礎とする段階，（4）選んだ指標を組み合わせてひとつの指数（index）を構成する段階，である。

[27] 指標のドリフトは 3 段階からなる（Lazarsfeld 1959, p.47-48）。（1）まず表現のための指標が，そもそも説明したかった観察だけでなくそれと異なる観察に結びつけられる。（2）これにより，予測のための指標の部分集合に違いが生じることになる。（3）その結果として最終的に，予測のための指標が表現のための指標と一緒にされて，「一般化された変量」を表現するという機能を持つようになる。この指標のドリフトはよくあることである。

1941）が描いたサドマドヒズム的性格という精神分析的モデルにもとづいたものだった。しかし Adorno, et al.（1950）では権威主義のイメージが，自身の道徳的問題の処理を融通のきかない形で行おうとすると同時に自我構造が弱い，というものになった。にもかかわらず，Adorno, et al.（1950）の研究で表現のための指標（因習主義，迷信，心理的投影の指標）として用いたものは，社会研究所の 1930 年代の研究で用いられたものとほぼ同じである。これに対し予測のための指標は，「そもそもの観察」の変化に対応して，変貌を遂げた。1930 年代の社会研究所の研究ではナチズムを意識してワイマール体制を守ろうとする意志を測定しようとするものになっており，（ナチズムの思想・政策と関連していたにもかかわらず）反ユダヤ的態度に関する質問はなかった。Adorno, et al.（1950）の研究では，当時のアメリカ合衆国での状況を反映して，反ユダヤ的態度に関する質問が含まれていたのである[28]。

さらに Lazarsfeld（1972, p.51, 訳 73 頁）になると，「ある有名な研究」として書名等を明示していないものの実質的に Adorno, et al.（1950）を念頭に置いて，権威主義的パーソナリティと少数民族に対する攻撃との関係に関してコメントをしている。少数民族に対する攻撃という傾向も権威主義的パーソナリティの一部と考えた方がよいか否かの判断にあたり，潜在構造分析を用いることを Lazarsfeld は推奨する。権威主義的パーソナリティを測定するための指標群（質問項目群）と少数民族に対する攻撃を測定するための指標群（質問項目群）とを分けて，それぞれに潜在構造分析を適用すると，それぞれが 1 次元尺度となっていることがわかるかもしれない。他方，ふたつの指標群をひとつにまとめたときには潜在空間が複雑になることもあるかもしれない。とはいえ，1 次元尺度が得られることがつねに望ましいというわけではない。調査研究の実質的関心からすれば，多次元の潜在空間を想定して潜在的類型論を考えることが正当な状況もある。

以上のようなコメントを読むと，Lazarsfeld は社会研究所のメンバーによる権威主義的パーソナリティ研究に関心を抱き続けたけれども，晩年になり潜在構造分析の考え方にもとづいてその方法論的課題をとらえ直したのではないかと考えることができる。とはいえ，社会研究所で権威主義研究に携わったメンバーとの結びつきは 1950 年以降弱

[28] Lazarsfeld（1959, p.54, n.29）はさらに，社会研究所の 1930 年代の研究と Adorno, et al（1950）には，理論上の違いと調査方法の違いとがあることも指摘している。理論面では，権威主義的パーソナリティの対極にあると想定するものが「革命的」パーソナリティか「民主的」パーソナリティかという違いがある。調査方法に関しては，自由回答質問も用いるか，言明を提示して賛否を尋ねる質問だけ用いるかという違いがある。

まり，再び共同研究を行う機運にはなかったのではないだろうか。Fromm はすでに 1939 年に社会研究所を離れ, 1941 年にコロンビア大学からも去って行った[29]。1950 年にはフランクフルトに社会研究所が再建されることになり，Horkheimer や Adorno は帰国の途に就いた。

4. 結びにかえて

Fromm 自身の著作や関連資料を検討することで，本稿の第 1 節で仮説 1 として述べたことをかなりの程度，確認できたのではないかと思う。（正確には，今のところ反証されていないというべきかもしれない。）彼は労働者・ホワイトカラー調査のデータ分析において，精神分析の考え方にもとづきながら，回答に現れた顕在的態度から潜在的なパーソナリティ類型を探ろうとした。それにより，「ドイツでナチズムが勝利したのはなぜか」という問いに対する答えが得られると期待したからである。彼は「左翼政党支持者の中にいた反抗的・権威主義的パーソナリティの人たちが後にナチス支持に回ったから」と答えることができると考えた。

これに対して仮説 2 に関しては, 間接的な証拠があるのみで, 部分的な支持にとどまっている。潜在的／顕在的という用語は精神分析で用いられてきたものである。Lazarsfeld は潜在構造分析の思想的源泉のひとつとして精神分析を挙げることがある。しかしそれは数あるものの中のひとつにすぎない。Fromm（1980）のもとになった社会研究所の調査研究やそれに自分がかかわったことに言及することはあっても，そこでの経験が潜在構造分析のアイディアに結びついたと明示的に述べているわけではない。

とはいえ，Lazarsfeld が権威主義的パーソナリティ研究に関してコメントをいくつか残していることは興味深い。その変遷を追ってみると，彼は潜在構造分析の考え方にもとづいてこの研究における方法論的課題をとらえ直すようになったと考えられる。

本稿では「問い」を主題とした社会学史を試みた。歴史的な考察には確証バイアスの問題がつきまとう。たとえば私は Fromm と Lazarsfeld が互いの問題関心や課題をよく

[29] Lazarsfeld と Fromm のその後を伝えるエピソードがある。Lazarsfeld の息子の数学者 Robert K. Lazarsfeld（1953- ）によれば，Lazarsfeld は 1950 年代・60 年代，有名人が自分のところに来るのを楽しみにしていた。Robert は，自分は覚えていないが父から聞かされたという次の話を紹介している。Fromm が自宅を訪ねてきたとき応対に出た Robert は，“Eric from where?” と尋ねた（Lazarsfeld 1998, p.143）。

理解し共有していたと想定してきた。しかしはたしてそうみなしてよいのか，考え直しを迫るような事実がある。自分への戒めのために記しておこう。Wiggershaus（1986, S.193）によると Fromm は 1936 年に Horkheimer にあてて書いた手紙の中で，Lazarsfeld について次のように述べている。「この仕事を価値あるものにするのにとりわけ重要な微妙な心理学的問題を，あまりよく理解していない。」[30]

社会学史としてより質の高い研究を行うためには，文献をさらに検索し検討を続けていくことが必要である。二次資料にとどまらず，手紙やインタビュー記録などの一次資料にもあたらなければならないだろう。その際には歴史の専門家から協力を得ることができればと願っている[31]。

付　　記

本研究の一部は，平成 28～30 年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（A）「多肢選択肢における回答行動の統合的研究：質問紙・ウェブ調査法の設計と妥当性の検

---

[30] 正確にいうとこれは Lazarsfeld と Herta Herzog（注 9 参照）のふたりについて述べた言葉である。

[31] 本稿で扱うことができなかったトピック，残された課題，派生的な問いなどについて，備忘録を記しておきたい。

（1）Fromm（1980）の調査を社会調査の歴史の中に位置づけて評価すること。すでに Bonß（1980）の論考があるので，それを踏まえてさらに掘り下げる必要がある。これは，社会研究所による経験的研究全体の再評価という課題にもつながる。

（2）Lazarsfeld による方法論的研究以外の分野での研究，特に投票行動研究・マスメディア研究（e.g. Katz and Lazarsfeld 1955；Lazarsfeld 1940；Lazarsfeld, Berelson, and Gaudet［1948］1968）などの再考察。そこで提示された仮説は，社会研究所のメンバーの権威主義研究やファシズム論に対する「対抗仮説」ではないだろうか。それはまた，ドイツやオーストリアの社会とアメリカ社会との比較という意味を持っていたのではないだろうか。

（3）精神分析に対する評価を科学哲学的・科学史的観点から再検討すること。Freud は精神分析を科学（自然科学）であると信じて疑わなかったであろう（Freud 1917）。Fromm も精神分析を科学だと考えていたし，Lazarsfeld も当初は同様だったのではないだろうか。当時，科学とは顕在的なものにもとづいて潜在的なものを探求し，潜在的なものによって顕在的なものを説明するという知的営為と考えられていたのではないか。（たとえば『夢判断』［Freud 1900］出版に近い年の出来事でいうと，メンデルの法則の再発見が 1890 年代後半でその報告が 1900 年，“gene”［遺伝子］という用語の提唱が 1909 年である。）しかしその後，Popper（1963, pp.43-51, 訳 57-67 頁）が「反証可能性」という視点から精神分析は疑似科学だと批判した。Fromm や Lazarsfeld は Popper による批判にどのような反応を示したのだろうか。

（4）Fromm あるいは Lazarsfeld と共同研究をした女性の研究者による貢献を明らかにすること。また女性の研究者をとりまく当時の社会状況を明らかにすること。これは教育史やジェンダーなどの観点からも重要な課題だと考えている。

討」（研究代表者：坂上貴之，課題番号：16H02050）の助成を受けて行いました。

本稿と並行して，日本における計量社会学の先駆者である西田春彦先生が潜在構造分析の発展にどのような貢献をしたかを論じる論文（木村 2021）を執筆しました。この論文では，西田先生の問題関心と Fromm, Lazarsfeld の研究との関連についても触れています。本稿とあわせてお読みいただければ幸いです。

Fromm と Lazarsfeld との関係に対する私の関心も，大学院生時代（1983 年ころ）に西田先生と雑談のような形で交わした会話から始まったものといえます。西田先生は当時，Lazarsfeld（1972）の翻訳に取り組んでおられましたが，その過程で Lazarsfeld とフランクフルト社会研究所のメンバーとの関係についても調べていると話していました。それについて自分ですぐに文献検索などをしてみなかったことが悔やまれます。しかし，Fromm（1980）の邦訳が 2016 年に復刊された際に入手し読み始め，そこに Lazarsfeld の名が出てくることに気づいてから，西田先生の言葉を思い出し，自分も本格的に調べてみなければと思うようになりました。ちょうど上述の科学研究費補助金の助成を研究分担者として受けることになったので，潜在構造分析や質問紙調査の歴史に関する文献等も集め始めました。

本稿の草稿に対してコメントをいただいた秋永雄一先生，増田真也先生，椎名乾平先生，辻本昌弘先生，吉村治正先生，そして執筆の過程で生じた様々な疑問に関して SNS を通してご教示をいただいた広田すみれ先生，池田謙一先生，奥川櫻豊彦先生に感謝申し上げます。ただし，本稿に誤りが含まれていれば，それはすべて私の責任です。

付録　潜在クラスモデルの現代的定式化と分析例

まず潜在クラスモデルを, Vermont（2010）, Collins and Lanza（2013）, Goodman（1974）などを参考にしながら，あらためて現代的な表記法で示しておこう。

潜在変数 X は離散変数であるとし，その値を潜在クラスと呼ぶ。潜在クラスの数を C とし，潜在クラスを x_c で表す。ただし $c = 1, 2, \cdots, C$ である。（ここで $1, 2, \cdots, C$ という数は潜在クラスの区別のためだけに用いており，順序を必ずしも想定していない。）任意の個体（個人）が潜在クラス x_c に属する確率を $\pi_{x_c} = P(x_c) = P(X = x_c)$ と表す（$\sum_c \pi_{x_c} = 1$）。確率は $P(X = x_c)$ などと表現するのが最も正確であるけれども，見やすさ

を重視し，混同や誤解などが生じそうにない限り π_{x_c} のような表記を用いる。

離散的な顕在変数（指標）が J 個あるとし，ベクトル $\boldsymbol{y}=(y_1,y_2,\cdots,y_j,\cdots,y_J)$ で表す。このベクトル $\boldsymbol{y}$ の j 番目の要素である顕在変数 y_j の反応カテゴリー数（y_j がとりうる値の数）を K_j で表す。顕在変数 y_j に対する個々の反応カテゴリーを $r_j=1,2,\cdots,K_j$ で表すことにする。（ただし，$1,2,\cdots,K_j$ という数は反応カテゴリーの区別のためだけに用いており，順序を必ずしも想定していない。）潜在クラス x_c に属する個体が顕在変数 y_j で $\mathrm{r_j}$ という反応をする確率を，条件付確率の形で，$\pi_{r_j|x_c}=P(r_j\,|\,x_c)$ と表す（$\sum_j \pi_{r_j|x_c}=1$）。

ここで J 個の顕在変数に対する反応パターンを列挙した配列を考える。その配列の行数は $\prod_{j=1}^{J} K_j$ に等しく，列数は J である。この配列に含まれるそれぞれの反応パターン（この配列の各行に対応するもの）は一般的な形で，$\boldsymbol{r}=(r_1,r_2,\cdots,r_j,\cdots,r_J)$ と表せる。たとえば顕在変数が 4 つ（すなわち $J=4$）ですべて 2 値変数である（すなわち $K_1=K_2=K_3=K_4=2$）として，1 番目から 3 番目までの顕在変数の反応カテゴリーがいずれも 1 で 4 番目の顕在変数だけが 2 であれば，その反応パターンは（1, 1, 1, 2）である。

潜在クラス x_c に属する個体がひとつの反応パターン $\boldsymbol{r}$ で反応する確率を，条件付確率の形で，$\pi_{\boldsymbol{r}|x_c}=P(\boldsymbol{r}\,|\,x_c)$ と表す（$\sum_{\boldsymbol{r}} \pi_{\boldsymbol{r}|x_c}=1$）。局所独立性を仮定すると，

$$\pi_{\boldsymbol{r}|x_c}=\prod_{j=1}^{J}\pi_{r_j|x_c}=\prod_{j=1}^{J}P(r_j\,|\,x_c)$$

である。したがって個体が反応パターン $\boldsymbol{r}$ で反応する確率 $\pi_{\boldsymbol{r}}=P(\boldsymbol{r})$ は，$\pi_{x_c}\pi_{\boldsymbol{r}|x_c}$ をすべての潜在クラスにわたって集計して，

$$\pi_{\boldsymbol{r}}=\sum_{c=1}^{C}\pi_{x_c}\pi_{\boldsymbol{r}|x_c}=\sum_{c=1}^{C}\pi_{x_c}\prod_{j=1}^{J}\pi_{r_j|x_c}$$

という形で表せる。（この等式はすべての反応パターンについて成り立つ。）顕在変数が 4 つの場合の模式図を図 A.1 として示しておこう。

推定したいのは，π_{x_c} や $\pi_{r_j|x_c}$ という，上の等式の右辺にあるパラメータである。左辺の項 $\pi_{\boldsymbol{r}}$ については，観測値から各反応パターンの相対度数を計算し，それを推定値 $\hat{\pi}_{\boldsymbol{r}}$ として用いる。パラメータの推定にあたって現在では EM アルゴリズムで最尤推定を

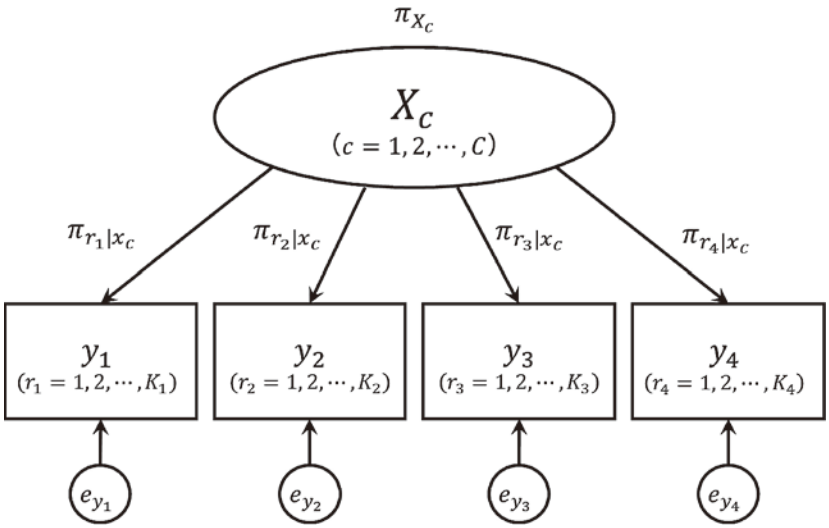

図 A.1　顕在変数が 4 つの場合の潜在クラスモデル
注　潜在変数を楕円で，顕在変数を長方形で表している。e_{y_j} は顕在変数 y_j に対応した誤差項。

行う統計パッケージ（たとえば R Statistics の poLCA［Linzer and Lewis 2011］）を利用するのが一般的である。推定されたパラメータをもとに期待度数を計算することも可能である。さらに，たとえば潜在クラス数に関する仮定が異なる複数のモデルからどれを選択するかという課題（モデル選択）に取り組むこともできる。その際，それぞれのモデルで求めた期待度数とデータでの観測度数との適合度を，尤度比カイ二乗値や情報量規準（AIC, BIC など）によって評価することになる。

顕在変数の数を 3 とし潜在クラス数を 2 と仮定したモデルを適用するという単純な場合の例を示そう。（顕在変数が 3 個でいずれも 2 値変数の場合，潜在クラスの数は最大で 2 という制約がある。）東北大学文学部教育文化研究会が実施した「教育と社会に対する高校生の意識」第 2 次調査では高校生に，今の日本社会を表すのにふさわしい言葉を，14 個の言葉の中からいくつでも挙げてもらう質問をしている（木村 1990）。それらの言葉の中から，とりわけ悲観的あるいは厭世的な意味を持つと考えられる，「退廃」，「混乱」，「不公平」という 3 つの言葉を取り上げる。この 3 つの言葉それぞれを選んだ場合を肯定的反応（＋），選ばなかった場合を否定的反応（－）として，反応パターン（＋＋＋，＋＋－など）に関する度数分布表を作成したのが表 A.1 である。最尤推定法により潜在クラスモデルのパラメータ推定を行った結果を図 A.2 に示す。

表 A.1　社会を表す 3 つの言葉への回答パターンと度数（n=982）

退廃	混乱	不公平	度数
+	+	+	45
+	+	−	14
+	−	+	40
+	−	−	18
−	+	+	103
−	+	−	130
−	−	+	227
−	−	−	405

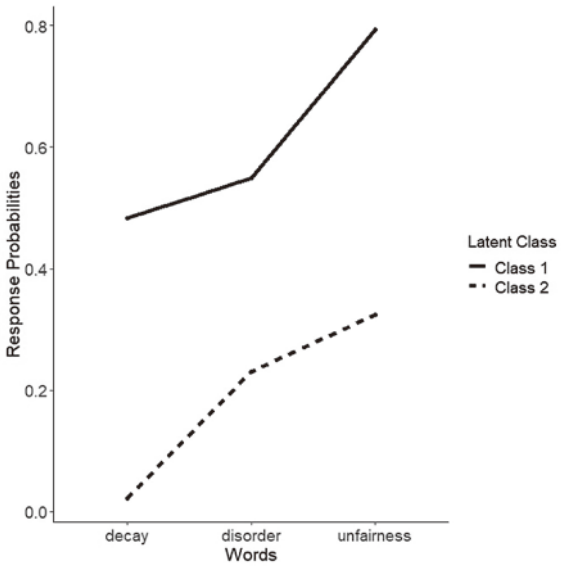

図 A.2　社会を表す 3 つの言葉の潜在クラス分析
decay : 退廃　disorder : 混乱　unfairness : 不公平
$\hat{P}$(Class 1) = 0.211, $\hat{P}$(Class 2) = 0.789

クラス 1 はどの言葉にも肯定的反応（+）をする確率が比較的大きく，悲観的な度合いが高いクラスといえる。これに対しクラス 2 はどの言葉にも肯定的反応（+）をする確率が小さく，悲観的な度合いの低いクラスといえる。また，ある回答者がクラス 1 に所属する確率は 0.211，クラス 2 に所属する確率は 0.789 であると推定される。なお，クラス 1 でもクラス 2 でも，3 項目を肯定的反応（+）の確率が高い順に並べると，「不公平」，「混乱」，「退廃」となっている。

顕在変数（2 値）の数が 3 で潜在クラスの数を 2 とする潜在クラスモデルの自由度は 0 で，推定されたパラメータから計算して得た期待度数は観測度数に一致するはずである。顕在変数の数が 4 以上の場合には，潜在クラス数に関する仮定を変えた複数のモデルを試してみて，それぞれのモデルに関する尤度比カイ二乗値や情報量規準（AIC, BIC など）を用いてモデル間比較あるいはモデル選択を行うことも重要である。また注 23 に挙げたようなより高度なモデルの適用を（データセットに関する条件が満たされていれば）考えてみることが必要な場合もあるだろう。

引　用　文　献

Adorno, Theodor W., Else Frenkel-Brenswik, Daniel J. Levinson, and R. Nevitt Sanford. 1950. *The Authoritarian Personality*. New York : Harper & Row.『権威主義的パーソナリティ』田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳 青木書店 1980.

Anderson, Theodore W. 1954. “On Estimation of Parameters in Latent Structure Analysis.” *Psychometrika*. 19 (1) : 1-10.

Anderson, Theodore W. 1968. “Appendix B : Large Sample Distribution Theory for Estimates of the Parameters of a Latent Class Model.” Pp. 273-287 in *Latent Structure Analysis* by Paul F. Lazarsfeld and Neil W. Henry, Boston : Houghton Mifflin.

浅野長一郎・江島伸興 1993.「潜在構造分析論の現状」『日本統計学会誌』22(3, 臨時増刊) : 357-373.

Baars, Jan, and Peer Scheepers. 1993. “Theoretical and Methodological Foundations of the Authoritarian Personality.” *Journal of the History of the Behavioral Sciences*. 29(4) : 345-353.

Becker, Howard S. 1998. *Tricks of the Trade : How to Think about your Research while You're Doing it*. Chicago : University Chicago Press.『社会学の技法』進藤雄三・宝月誠訳 恒星社厚生閣 2012.

Bonß, Wolfgang. 1980. „Kritische Theorie und empirische Sozialforschung : Anmerkungen zu einem Fallbeispiel.“ S.7-46 in *Arbeiter und Angestellte am Vorabend des Dritten Reiches* bei Erich Fromm, Stuttgart : Deutsche Verlags-Anstalt, 1980.

Brunner, José. 1994. “Looking into the Hearts of the Workers, or : How Erich Fromm Turned Critical Theory into Empirical Research.” *Political Psychology*. 15(4) : 631-654.

Clavey, Charles H. 2019. “Resiliency or Resignation : Paul F. Lazarsfeld, Austro-Marxism, and the Psychology of Unemployment, 1919-1933.” *Modern Intellectual History* (published online), 1-25. DOI 10.1017/S1479244319000192

Clogg, Clifford C. 1981. “New Development in Latent Structure Analysis.” Pp.215-246 in *Factor Analysis and Measurement in Sociological Research*, edited by David J. Jackson and Edgar F. Borgatta. Beverly Hills, California : Sage.

Clogg, Clifford C., and Leo A. Goodman. 1984. “Latent Structure Analysis of a Set of Multidimensional Contingency Tables.” *Journal of the American Statistical Association*. 79(388) : 762-771.

Clogg, Clifford C., and Leo A. Goodman. 1985. “Simultaneous Latent Structure Analysis in Several Groups.” *Sociological Methodology*. 81-110.

Collins, Linda M., and Stephanie T. Lanza. 2013. *Latent Class and Latent Transition Analysis*. New York : John Wiley & Sons.

Freud, Sigmund. 1900. *Die Traumdeutung*. Leipzig und Wien : Franz Deuticke.『夢判断』（上・下）高橋義孝訳 新潮社（新潮文庫）1969.

Freud, Sigmund. 1917. *Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse*. Wien : Internationaler Psychoanalytischer Verlag.『精神分析学入門』（I・II）懸田克躬訳 中央公論新社（中公クラシックス）2001.

Freud, Sigmund. 1923. *Das Ich und das Es*. Wien : Internationaler Psychoanalytischer Verlag.「自我とエス」『自我論集』武田青嗣編・中山元訳 筑摩書房（ちくま学芸文庫）1996, 201-272 頁.

Fromm, Erich. 1936. „Sozialpsychologischer Teil.“ S.77-135 in *Studien über Autorität und Familie*, Max Horkheimer, Hrsg. Paris : Librairie Félix Alcan.「権威と家族」『権威と家族』安田一郎訳 青土社 1977, 7-83 頁

Fromm, Erich. 1941. *Escape from Freedom*. New York : Holt, Reinhart and Winston.『自由からの逃走』日高六郎訳 東京創元社 1951.

Fromm, Erich. 1980. *Arbeiter und Angestellte am Vorabend des Dritten Reiches*. Stuttgart : Deutsche Verlags-Anstalt.『ワイマールからヒトラーへ』佐野哲郎・佐野五郎訳 紀伊國屋書店 1991.

Fromm, Erich, and Michael Maccoby.［1970］2017. *Social Character in a Mexican Village*. London : Routledge.

藤原翔・伊藤理史・谷岡謙．2012.「潜在クラス分析を用いた計量社会学的アプローチ」『年報人間科学』33 : 43-68.

Gibson, W.A. 1955. “An Extension of Anderson’s Solution for the Latent Structure Equations.” *Psychometrika*. 20（1）: 69-73.

Gibson, W. A. 1959. “Three Multivariate Models : Factor Analysis, Latent Structure Analysis, and Latent Profile Analysis.” *Psychometrika*. 24（3）: 229-252.

Goodman, Leo A. 1974. “Exploratory Latent Structure Analysis Using Both Identifiable and Unidentifiable Models.” *Biometrika*. 61（2）: 215-231.

Goodman, Leo A. 1979. “A Note on the Estimation of Parameters in Latent Structure Analysis.” *Psychometrika*. 44（1）: 123-128.

Green, Bert F. 1951. “A General Solution for the Latent Class Model of Latent Structure Analysis.” *Psychometrika*. 16（2）: 151-166.

Haberman, Shelby J. 1988. “A Stabilized Newton-Raphson Algorithm for Loglinear Models for Frequency Tables Derived by Indirect Observation.” *Sociological Methodology*. 18 : 193-211.

Henry, Neil W. 1999. “Latent Structure Analysis at Fifty.” Paper presented at the 1999 Joint Statistical Meeting, Baltimore MD, August 11, 1999. http://www.people.vcu.edu/～nhenry/LSA50.htm（retrieved May 31, 2018）

Horkheimer, Max, Hrsg. 1936. *Studien über Autorität und Familie*. Paris : Librairie Félix Alcan.

Jahoda, Marie, Paul F. Lazarsfeld und Hans Zeisel. 1933. *Die Arbeitslosen von Marienthal*. Frankfurt am Main : Suhrkamp.

Jay, Martin. 1973. *The Dialectical Imagination : A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research, 1923-1950*. Berkeley : University of California Press.『弁証法的想像力』荒川幾男訳 みすず書房 1975.

Katz, Elihu, and Paul F. Lazarsfeld. 1955. *Personal Influence*. New York : Free Press.『パーソナル・インフルエンス』竹内郁郎訳 培風館 1965.

木村邦博．1990.「高校生の社会意識における不公平感の位置」『教育と社会に対する高校生の意識―第 2 次調査報告書―』海野道郎・片瀬一男編 東北大学文学部教育文化研究会 1990, 73-88 頁.

木村邦博．2009.「『問い』を主題とした学説研究の重要性―科学としての社会学と歴史学としての社会学史の発展のために―」『社会学年報』38 : 31-41.

木村邦博．2021.「潜在構造分析の発展―西田春彦の貢献―」『社会学年報』50 : 21-33.

Lazarsfeld, Paul F. 1934. “The Psychological Aspect of Market Research.” *Harvard Business Review*. 13（1）: 54-71.

Lazarsfeld, Paul F. 1937. “Some Remarks on the Typological Procedures in Social Research.” *Zeitschrift für Sozialforschung*. 6(1) : 119-139.

Lazarsfeld, Paul F. 1940. *Radio and the Printed Page*. New York : Duell, Sloan, and Pearce.

Lazarsfeld, Paul F. 1950a. “The Logical and Mathematical Foundation of Latent Structure Analysis.” Pp.362-412 in *Measurement and Prediction*, by Samuel A. Stouffer, Louis Guttman, Edward A. Suchman, Paul F. Lazarsfeld, Shirley A. Star, and John A. Clausen. [Princeton, New Jersey : Princeton University Press.] New York : Science Editions, John Wiley &Sons, [1950] 1966.

Lazarsfeld, Paul F. 1950b. “The Interpretation and Computation of Some Latent Structures.” Pp.413-472 in *Measurement and Prediction*, by Samuel A. Stouffer, Louis Guttman, Edward A. Suchman, Paul F. Lazarsfeld, Shirley A. Star, and John A. Clausen. [Princeton, New Jersey : Princeton University Press.] New York : Science Editions, John Wiley & Sons, [1950] 1966.

Lazarsfeld, Paul F. 1954. “A Conceptual Introduction to Latent Structure Analysis.” Pp.349-387 in *Mathematical Thinking in the Social Sciences*, edited by Paul F. Lazarsfeld. Glencoe, Illinois : Free Press.

Lazarsfeld, Paul F. 1955. “Interpretation of Statistical Relations as a Research Operation.” Pp.115-125 in *The Language of Social Research*, edited by Paul F. Lazarsfeld and Morris Rosenberg. Glencoe, Illinois : Free Press.

Lazarsfeld, Paul F. 1958. “Evidence and Inference in Social Research.” *Daedalus*. 87(4) : 99-130.

Lazarsfeld, Paul F. 1959. “Problems in Methodology.” Pp.39-78 in *Sociology Today*, edited by Robert K. Merton, Leonard Broom, and Leonard S. Cottrell, Jr. New York : Basic Books.

Lazarsfeld, Paul F. 1962. “The Sociology of Empirical Social Research.” *American Sociological Review*. 27 (6) : 757-767,

Lazarsfeld, Paul F. 1966. “Concept Formation and Measurement in the Behavioral Sciences : Some Historical Observations.” Pp.144-202 in *Concepts, Theory, and Explanation in the Behavioral Sciences*, edited and with introductions by Gordon J. DiRenzo. New York : Random House.

Lazarsfeld, Paul F. 1969. “An Episode in the History of Social Research : A Memoir.” Pp. 270-337 in *The Intellectual Migration : Europe and America, 1930-1960*, edited by Donald Fleming and Bernard Bailyn. Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press.「社会調査史におけるひとつのエピソード：メモワール」今防人訳『亡命の現代史 4 社会科学者・心理学者』みすず書房 1973, 181-287 頁。

Lazarsfeld, Paul F. 1972. *Qualitative Analysis*. Boston : Allyn and Bacon.『質的分析法』西田春彦・高坂健次・奥川櫻豊彦訳 岩波書店 1984.

Lazarsfeld, Paul F., and Allen H. Barton. 1951. “Qualitative Measurement in the Social Sciences : Classification, Typologies, and Indices.” Pp.155-192 in *The Policy Sciences : Recent Developments in Scope and Method*, edited by Daniel Lerner and Harold D. Lasswell. Stanford : Stanford University Press.

Lazarsfeld, Paul F., Bernard Berelson, and Hazel Gaudet. [1948] 1968. *The People's Choice*, 3rd ed. New York : Columbia University Press.『ピープルズ・チョイス』有吉広介監訳 芦書房 1987.

Lazarsfeld, Paul F., and Neil W. Henry. 1965. “The Application of Latent Structure Analysis to Quantitative Ecological Data.” Pp.333-348 in *Mathematical Explorations in Behavioral Science*, edited by Fred Massarik and Philburn Ratoosh. Homewood, Illinois : Irwin & Dorsey.

Lazarsfeld, Paul F., and Neil W. Henry. 1968. *Latent Structure Analysis*. Boston : Houghton Mifflin.

Lazarsfeld, Robert K. 1998. “Some Family Snapshots.” Pages 141-146 en *Paul Lazarsfeld (1901-1976). La sociologie de Vienne à New York*, sous la direction de Jacques Lautman et Bernard-Pierre Lécuyer. Paris : L'Harmattan

Linzer, Drew A., and Jeffrey B. Lewis. 2011. “poLCA : An R Package for Polytomous Variable Latent Class Analysis.” *Journal of Statistical Software*. 42(10). DOI 10.18637/jss.v042.i10

Mooijaart, Ab, and Peter G. M. van der Heijden. 1992. “The EM Algorithm for Latent Class Analysis with

Equality Constraints." *Psychometrika*. 57（2）: 261-269.

Popper, Karl. 1963. *Conjectures and Refutations*. London : Routledge and Kegan Paul.『推測と反駁』藤本隆志・石垣寿郎・森博訳 法政大学出版局 1980.

Samelson, Franz. 1993. "The Authoritarian Character from Berlin to Berkeley and Beyond." Pp.22-43 in *Strength and Weakness : The Authoritarian Personality Today*, edited by William F. Stone, Gerda Lederer, and Richard Christie. New York : Springer-Verlag.

Sills, David L. 1968. "Lazarsfeld, Paul F." Pp. 411-427 in *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol.18, edited by David L. Sills. New York : Macmillan ; Free Press.

Sills, David L. 1987. "Paul F. Lazarsfeld, 1901-1976, A Biographical Memoir." *Biographical Memoir.* 56 : 251-282. National Academy of Sciences, Washington D.C.

Sobel, Michael E. 1997. "Measurement, Causation and Local Independence." pp.11-28 in *Latent Variable Modeling and Applications to Causality*, edited by Maia Berkane. New York : Springer.

Stone, William F., Gerda Lederer, and Richard Christie, eds. 1993. *Strength and Weakness : The Authoritarian Personality Today*. New York : Springer-Verlag.

Stouffer, Samuel A., Louis Guttman, Edward A. Suchman, Paul F. Lazarsfeld, Shirley A. Star, and John A. Clausen. [1950] 1966. *Measurement and Prediction*. [Princeton, New Jersey : Princeton University Press.] New York : Science Editions, John Wiley & Sons.

Vermunt, Jeroen K. 2010. "Latent Class Models." Pp.238-244 in *International Encyclopedia of Education*, vol.7, edited by P. Peterson, E. Baker, B. McGaw. Oxford : Elsevier.

Wheatland, Thomas. 2004. "Critical Theory on Morningside Heights : From Frankfurt Mandarins to Columbia Sociologists." *German Politics and Society*. 22（4）: 57-87.

Wheatland, Thomas. 2005. "Not-Such-Odd Couples : Paul Lazarsfeld and the Horkheimer Circle on Morningside Heights." Pp.169-184 in *Exile, Science and Bildung : The Contested Legacies of German Emigre Intellectuals*, edited by David Kettler and Gerhard Lauer. New York : Palgrave Macmillan.

Wiggershaus, Rolf. 1986. *Die Frankfurter Schule : Geschichte, theoretische Entwicklung, politische Bedeutung*. München : C. Hanser.

Zeisel, Hans. 1979. "The Vienna Years." Pp.10-22 in *Qualitative and Quantitative Social Research*, edited by Robert K. Merton, James S. Coleman, and Peter H. Rossi. New York : Free Press.

Erich Fromm, Paul F. Lazarsfeld, and the Genesis of Latent Structure Analysis : Psychoanalysis and Quantitative Analysis of the Authoritarian Character

KIMURA Kunihiro

This paper explored how the idea of latent structure analysis had emerged, focusing on the questions that Erich Fromm and Paul F. Lazarsfeld had posed. Although Lazarsfeld had first published the idea in his contribution to the methodological volume of the research concerning U.S. Army during World War II, its origin might be traced back to his collaboration with Fromm in 1930s.

Fromm had asked why the Nazi had gained voters' support. He had analyzed the data from a survey of German workers and employees and tried to elucidate their latent personality types by interpreting their manifest response patterns to the closed questions and their answer to open-ended questions. The conceptual scheme of the manifest and the latent had been derived from Freud's psychoanalysis, and the methods employed in the data analysis had been suggested by Lazarsfeld. Fromm had eventually reached the hypothesis that, among the supporters of radical political parties, there had existed "rebellious-authoritarians," who had refused the existing authority but retained their authoritarian character.

Lazarsfeld had shared intellectual backgrounds with Fromm, in the sense that both of them had been influenced by Marxian social theory and psychoanalysis. His experience of advising Fromm in the statistical analysis seemed to have contributed to advancing his methodological inquiry. He had continued to tackle with the problem of the inference on unobservable types of respondents from the observed response patterns in surveys, or the inference on latent variables from manifest variables. He had eventually formulated the method in a conceptually and mathematically rigorous manner, which he called latent structure analysis.

Fromm's work had laid the foundation for the succeeding studies on authoritarian personality, including the famous book by Adorno and his colleagues. Lazarsfeld had left his methodological comments on the book from the perspective of latent structure analysis.